うした仕事のおくれや不足は、島田氏がぶつかられた問題のひとつの要因にすぎないと私は思う。日本史研究にはその「ギルド」のくせがあり、西洋史研究にも、やはりその「ギルド」のくせがある。私たちは、日本史研究・西洋史研究の成果を理解しようとする場合、日本史研究者・西洋史研究者の姿に自分自身を似せて考えることに慣れてしまっている。それは、この分野の研究には、近代ブルジョア史學の基礎がともかくも築かれていて、私たちの日常的意識＝常識が、このような日本史研究・西洋史研究に近づきやすくなっているからである。中國史研究の成果を理解しようとする人たちは、やはり中國史研究者の姿に自分自身を似せることによってしかそれを理解できない。しかし、その發想法は、「正史」の發想、士大夫の發想を引きずっているから、要するに「通」でないとわかりにくいのである。知識の量よりも問題は知識の體系の方にある。しかし、從來の日本史研究・西洋史研究の體系が受け入れやすいように中國やアジアの近代を説明し直してみたとしても、中國やアジアの近代の現實を説明したことには決してならないだろう。困難はそこにあるはずである。打ち破るべきは、まず、中國やアジアの近代をつかみ切れない士大夫的世界觀やブルジョア史學の方法であり、固有名詞や用語を使う場合のせまい「ギルド」意識である。文獻の飜譯・解題・目錄・索引作成の仕事は、問題解決のひとつの要素にすぎない。

『辛亥革命の思想』は、基本思想において一致した共同研究グループが、讀者に訴えかけようとする何ものかをもって出版したものであり、辛亥革命についてのひとつのイメージ構成を積極的に意圖したものであって、漠然とした文獻紹介ではない。單なる文獻主義、蓄積趣味の仕事では決してない。「旗幟」が鮮明であり、健全な研究業績である。

しかし、一般的には、文獻の考證・解題・目錄作成・索引作成等の仕事の發展は、研究の健全な發展にとって「毒」にもなり「藥」にもなるものである。文獻と考證で重武裝して、歷史の全體的展望を持たずに自分の小さな城をどこかに築いてそれを生涯守りつづけようとするような研究が、革命運動史研究をむしばみ、革命思想の研究をもおかすようになることは、今日の思想狀況と學界の狀況から考えてむしろ當然の成り行きと思われる。中國近代史の學問は、そのようなものとして當分肥大化を續けるであろう。

本書の編集・飜譯・解説に携わった方がたと、私自身をもふくむ本書の讀者が、本書によって築いたもの、本書から學んだものを、今後どのような方向に發展させて行くかは重要な問題であると同時に、また興味ある問題でもある。

（石田　米子）

宋代商業史研究

斯波義信著

昭和四十三年二月　風間書房刊
A5判　本文五二二頁　附索引

唐宋時代の經濟史上における顯著な特色の一つは、言うまでもなく、商業の未曾有な發展である。商業經濟は、特に宋代に入っていっそうの進歩發展を見た。宋代の經濟史研究は、田制や通貨の問題

および專賣制の問題などを通して、各方面に著しい進歩をみたのである。しかし經濟現象の多樣性と複雜性とは、豐富な宋代經濟史研究の成果をもってしても、決して我々の歷史把握を十全にさせ得なかった。しかもその多樣性は、しばしば多くの成果をして、分散的孤立的なものにする危險をはらんでいるのである。そして最もその危險性のある商業史の分野で、本書「宋代商業史研究」という大作を獲たことは同時代を研究する者にとっては言うまでもなく、多くの研究者に裨益すること甚大である。

著者斯波義信氏は、東京大學、同大學院を經て、東洋文庫研究生となられ、現在、熊本大學に奉職されている。氏は、「南宋米市場の分析」において、最も重要にして、普遍的な商品である米を取り上げられて、その流通過程を追求し、當時の複雜な市場構造を明らかにされた。以來、氏は宋代商業史に焦點を合わせて、研究をすすめられたのである。恐らく、和田清編「宋史食貨志譯註（一）」の「和糴」を擔當されて、難解なこの史料に、詳細な譯註を施されたことは、氏の研究を更に強固に確實にされたのであろう。引續いて「宋代における福建商人とその社會經濟的背景」「宋代の幹運・經紀について—經營技術の初期の發達に關する史的考察—」「宋代江南の村市 market と廟市 fair」「宋の力勝稅について—日常的消費の展開と關連して—」等を發表され、一貫して宋代商業史の研究を體系的におしすすめてこられた。この後、氏は本書の執筆に缺くことのできない著者自身のノートとして、「宋代商業史研究のための覺書」をまとめられた。これは本書の第一章を構成するものである。この「覺書」において、自らの研究體制に、一つの區切りをつけられた氏は、さらに「宋代の製紙業—その生產と流通—」「宋代運船業の基礎構造」「宋代運船業の經營構造」によって、製紙業と運船業とを詳細・明確に考證されたのである。この他「10～13世紀における中國都市の轉換」なる論文を發表されているが、筆者は讀む機會に惠まれなかった。

本書は、右のように體系的に展開してこられた、著者の研究をふまえて、「宋代商業史研究」として既出の論文と、新たに研究されたものとを系統的にまとめて刊行されたものである。以下、章をおって紹介していきたい。

第一章、問題の基本的考察。本章は總論である。本章の序論に、唐末宋における「商業の繁榮」「商品貨幣經濟の展開」という歷史事實の科學的な解明の第一步として『基本的な史實を確認し、觀點と概念內容を明確にし、學說、研究史の傾向、實證の成果と問題點について、一應の展望を果』すと述べられている。これが本章の內容を端的に示している。第一節、考察の端緒。まず、唐宋の變革期における商業の繁榮を再確認され、宋代の商業の範圍と限界が、當時の社會經濟秩序全般の中で定位されなければならないし、その際、商業史と農業史を『舊型の商業史叙述』が採ったように分離させるのではなくて、これを統一して、『生產の發達の度合に規定された社會的分業の展開』を實證し、又、政府・民間雙方の領域において、歷史事實を分析把握した上で、それらの社會的比重を規定する必要がある。さらに前近代にあっては商業の役割が、當該社會の構成形態の如何によって決定されるのであるから、商業史研究が歷史研究に占める比重は決して輕くなく、歷史解明の一つの重要な手段であることを論じられるのである。

第二節、問題史的考察。最初に宋代商業史の研究を導いてきた主

要な見解をまとめられ、これらの見解の上に積み上げられた許多の業績をふまえて、現在においては『商業發展の意義や時代的性格や社會的比重を直接の課題として追求』することが重要であると述べられる。

第三節、實證の現狀と問題點。本節では、これまで多くの研究者によってなされた膨大な研究業績を

〔一〕 遠隔地商業の形態と内容。A交通・運輸。（イ）交通・運輸の一般的形態（構造・勞働・所有關係）、特質。（ロ）漕運・市船・商稅制度。B全國的市場の形成。（イ）自然的特産物の生産と流通。（ロ）手工業的特産物の生産と流通。C遠隔地流通。

〔二〕 都市、ギルドの轉換。A都市。Bギルド。

〔三〕 流通組織（配給組織）の整備。

〔四〕 商業利潤・商人資本。

〔五〕 國家と商業。

の項目に分けて整理され、各分野の綜括と問題點の抽出、將來の研究の展望など、本書をまとめられるに當って、不可缺な總論を展開されているのである。

著者の商業史研究に對する見通しは、第二節にみられるように、當時の『商業の機能は、一面的に「解體的」、「解放的」と解するよりも、「構成的」、「相互規定的」と解することによって、歴史事實の適正な評價と、新しい研究分野の開拓が、はじめて合理的に行われるであろう』という點に要約できると思われる。これら著者の問題把握と見解および將來の展望とは第二章以下の各個研究を導くのである。なお、第二節、第三節の諸多の學說の整理統合、とりわけ第三節にみられる諸研究の紹介と系列化は、大變有用な學說史であり學界展望である。

第二章、宋元時代における交通運輸の發達。宋代では、社會機構の發達に伴って、官用交通（貢租・官僚・軍隊・公文書などの移動）が急速に發達したが、一方では、社會生産力の向上が商品流通と社會分業の新局面を切り開き、それがために、農村の局地的な流通や、遠隔地間の商品及び人の移動を媒介する民間運輸業が擡頭してきた。從來の研究がむしろ官用交通を問題としていたが、『同時に同等の比重において、上昇する民間運輸業の自律的な力と社會體制との相關關係を統一的に究明することも、宋代交通史の重要課題である』と述べられている。本章では、當時の重要な交通運輸手段であった運船業をとり上げられた。

第一節、運船業の基礎構造。「一、船舶の種類と形態」。ここでは、船型・船種に關する文獻から各種船舶をA地域別、B用役別、C形態別に分けて百種以上の船舶の名稱が擧げられている。以下「二、船舶の構造と動力」〔三〕「運船企業の集中と專業化」と、考察を進められて、『民間運船業は官用交通に依存しつつも、自らの交通手段（各種船舶・動力）を技術的に改良して地理的距離の克服、輸送量の增大を實現し、市場を擴大したこと、また全國各地の水運の要地における運船業の集中と專業化が、先進・後進地、平野・山村を問わず、後背地農村の社會的分業を促進する契機をもたらし、交通手段の創設に必要な資材の生産販賣をも刺戟したこと』を考證、解明されるのである。

第二節、運船業の經營構造。本節では、運船業の經營上の諸問題がとりあげられている。〔一〕「勞働の諸性質」。ここでは、運船

業に關する各種勞働をとりあげられ、各種船舶について、船内および船外勞働に分けて名稱・擔當業務・員數などを明らかにされ、次いで船夫の募集範圍とその出身階層について、運船業における協業の核は家族であり、もし、船夫の召募が家族の範圍を越えるときは、同郷とか同業のような緣故の中に求められていた。また『船夫は率ね凶作や貨幣經濟の壓迫によって農村離脱を餘儀なくされた窮乏農民や、山村經濟の變貌に伴って積極的に副業的、非農業的職種への轉出を計った山村農民を出身基盤としていた』ことを論じられ、さらに報酬「工錢」について具體的に述べられる。

〔二〕「經營の諸性質」。宋代の運船業は自船運送を基本形態としていたが、交通用役の自己生産から、ここでも商品生産化がおこなわれはじめ、經營形態も相應に分化してきたとして、〔I〕「所有（占有）の形態」を考察され、一方においては、投機的な富商・海商や商人組合の經營、他方には中小資産階層の農民の兼業的經營や、水上生活者や農村離脱者の窮迫的な零細經營などにみられる船主の直接經營には、自ら經營擴大の限界が存在したこと。やがて、これより一歩進んだ經營形態として、陸上の船主と海上の經營委託者とが分離するという「企業形態」と「出資」との分化が發生し、さらに他人の船舶を占有租賃する傭船も行われるようになったことを論證される。〔II〕「出資と經營」〔III〕「運送契約」。こうして發達してきた交通業は、企業としての獨立性を高め、その現れとして運送契約、運送保險の慣行が確立し、それと共に船行（船問屋）の慣行も發達した。また、多數の小企業が企業職能を溫存したまま大企業の傘下に結集して廣大な支店網組織を形成し、地域間の價格差を利用して利潤抽出を有利に展開・支配した形態もあって、『海運業に關しては「合手組合」や「船舶共有組合」、「コンメンダ（持分出資）」等の慣行が出揃い、前期的資本の萠芽的集中形態がみられた』ことを明らかにされている。さらに、水運業の勞働力が、唐宋以來の農村の一定程度における解體過程から派生した農村過剰人口の出稼勞働に基づくため、農村の社會關係を反映して家父長的家族關係に擬して協業が行われ、ギルド的性格が濃厚であったと結ばれている。

宋會要、長編、文集類等の基本資料はいうまでもなく、隨筆、雜記、野史、雜史のすみずみまで資料を探求され、問題を一つ一つ解決されて行かれる手堅い手法に、全く敬服させられるのである。ただ、茶鹽商人らの「獨占商人」と「富裕な商人」という區別（一〇九頁）が、どういう點でつけられるのか、また、國家權力の支配が徵稅以外には、このような民間の運船業に對して全く存在しなかったのか、さらに民間の自律的運船業が、國家權力と結合した官僚らと全然かかわりあいを持たないで存在し得たのであろうか、もし存在し得たのなら、このような民間の運船業が有利であった原因はなにか、という素朴な疑問を感じるのである。

第三章、宋代における全國的市場の形成。宋代に形成された全國的な特産物市場について、まず著者は、當時の國際的、國内的市場における商品と、その貿易の仲繼交換地點を列擧され、その中の主な自然的及び手工業的特産品の生産と流通を追求される。

第一節、自然的農業的物資の特産化と流通。〔一〕米穀。最初に取上げられるのは、當時の主要農産物、米である。ここでは主として南宋の場合について考察される。「一、生産と流通」。灌漑の發達、品種の改良、農耕技術の集約化、作附面積の增大などによって

米の生産は飛躍的に伸長したが、地域的な生産力の差は、經濟的な先進・後進地域を明瞭に色分けし、豐かな生産地から、低度の生産地への米の移動の中に、商品としての流通と市場の成立とが想定できると考えられる。さらに稻米が廣く食用に供せられていて、品質・價格・收穫時期の差によって、稻米の品種・銘柄の分化が存在したが、これは、米の商品化を證明する事實であるとされ、併せて、消費市場の構造を明らかにされる。ついで、當時の流通狀況を各路別に概觀され、臨安府・建康府・鄂州等の首都や軍隊の集結地および大都會が、地方的な中心市場であったこと、米の生産地から消費地への流出は、大量にして遠距離であり、さらに商人によって任意に販賣されていたことなどを指摘されている。「二、市場構造」。ここでは、生産者である農民から消費者にいたる米の流通過程にあらわれる步擔または負擔・米主または場家または停場家・米船または米商・米牙人・米鋪等の役割や相互關係を明らかにして、米の市場構造を分析されている。「三、南宋米市場の特質」は、商人では在鄕富農や客商、すなわち米船や富農・場家の經濟的意義が重要であること、米が高度な商品性を持っていて、全國的市場圈を形成していたこと、市場は、閉鎖的な性格で、牙人牙行が支配的であったこと、などである。最後に全體のまとめとして、商品市場における生産の地域差の存在、地方的産業の專業化傾向、遠距離通商の發展、牙行らの仲介による局地的市場圈と客商支配下の流通機構の結合などを指摘されている。

つづいて、油脂・蠟燭、蔬菜、果實、砂糖、木材、その他—耕牛・養魚等—などについて、種類、生産および製造法、用途、商品的價値、流通などについて詳述されているが、ここでは割愛する。非常に詳細に論證されているにもかかわらず、それらが單に考證の成果の羅列にとどまらず、宋代の商業との關連の上でとらえられていることは、著者の考證における手法と共に、大いに啓發させられるのである。

第二節、手工業的物質の特産化と流通。本節では紙、絹織物、漆器附漆液、その他—鐵器・銅器等、に分けて、前節同樣、宋代の商業におけるこれら手工業的諸物質について考察される。個々の物質についての紹介は省くが、要するに手工業的物質が、都市を中心とする士大夫・庶民など全般的な生活文化の向上と奢侈的消費の增大によって、特産物化および商品化されて行ったことを論證されるのである。ここでも、可能な限りの資料の蒐集と整理が行われ、未開拓分野の諸問題が、一つ一つ解明されている。ただ、著者の視點が、民間における商業の把握にあるので、むしろ當然ではあるけれども、社會現象全般と緊密な關係を有していた士大夫官僚と、これら自然的農業的および手工業的物質との關係は、單なる商品と消費者との關係にはとどまらず、むしろ生産過程、流通過程においても、官僚らの影響力は純民間企業より優勢であったか、少くとも相當な勢力を持っていたとは考えられないだろうか。

第四章、宋代における都市、市場の發展。第一節、宋代都市の經濟的形態。宋代の都市の經濟的實態を例外的な大都市中心ではなく、標準的・平均的な地方都市について考察される。「一、都市領域—都市農村間分業の變動—」では、遠隔地商業の發展に伴う商人の定住や農村人口の集中によって、城郭・鄕村の分業編成が崩れて、市域の擴大や、衞星都市を含む近郊地域の發達が商業都市に生じ、地方農村との間には、商品流通に基づく新たな分業編成が生じ

たこと、商業發展に促された農村の局地的な生產の向上を背景として、需給の中心が地方に擴散し、都市經濟の網の目が一段と密になったことなどを明らかにされる。さらに宋代の都市農村間の分業構造は、商業都市と周邊農村、および局地内の市場町とその周邊農村などとが互いに重複しながら有機的に秩序づけられていたが、行政的には、官府の支配力が強く、市場地の政治寄生的性格がみられ、それはとりもなおさず『市場の狹さに由來する農民的商品流通機構の構造の弱さを表明』していると說かれる。「二、都市的土地所有—課稅原理と都市の再編成—」では、都市内の土地家屋に對する富商富農の二次的投資が活潑になり、そのために都市土地所有を通じて都市を經濟的に再編成する必要が生じたこと、免役法、方田均稅法など新法の改革を經て、商工業者が土地（家屋）所有者に支拂う地代を課稅基準として掌握する體制が北宋末から南宋初にかけて成立したこと、などを論ぜられる。「三、都市人口都市市場の性格」では、非生產流寓人口が農業から離脫して都市や市場地に寄生したこと、富豪・大商人らの資產階層と多數の零細小工業者らが一般都市人口の構成要素であったが、市民層の貧富兩極への分解は決定的なものになったこと、都市の市場は窮極において少數の富豪の資產に依存しており、從って都市商工業者の發展に一定の限界のあったことなどを明らかにされる。また官僚自ら資產の增殖をはかる者もあり、一方では買官によって特權的な商業をなさんとした商工業者も多數存在したと述べておられるが、むしろ、これらの方が一般的であったと考えられるのではないだろうか。また、都市市場が少數の富豪の資產に支配されていたと說かれるが、これも、市場に對する支配力と富豪との關係は、かなり官僚と市場支配力との關係に置換できるのではないだろうか。

第二節、宋代江南の村市と廟市。本節では、地方的小都會の下層に廣範に分布する小規模の市場 market-place や、不定期に超地方的に開催される廟市の實態について、主に江南・四川の場合を追求される。「一、宋代江南の村市」では、墟市が江西、湖南、廣南、福建地方の小規模な村落の市であり、亥市・山市・孩市・村市・野市・草市などの名稱で呼ばれたこと、墟市は率ね村落の市として發生し、これが開かれる聚落は數家の村から數百家の市や鎭に及んだこと、墟市の分布密度は最小五支里ほどであって、近接し過ぎると市場圈の問題から紛爭が起ることもあったこと、墟市の商業統制と保安維持は、建設者であり租稅請負人である在地士豪・商人と、保安及び徵稅面から關與する官府との利害の一致において行われ、官府の金錢收入は地方財源に充てられたことなどを考察される。「二、宋代江南の廟市」では、商業取引の祭市であった寺廟市について、その開催地、時期、商品、商人等を考證され、一般の村市とは相違すると說かれる。そして大小の村市・廟市など定期市の重層的存立が、大量の需要と供給とを結合し、市場價格を形成する點に、地方經濟におけるこれら諸交換點の特有な發展の意義があると結ばれる。ここでも、徹底した資料蒐集と詳細な考證、および煩雜な資料の圖表化が見られ、大いに理解に役立っている。

第五章、商業組織の發達。本章では、宋代の商品流通における仲買業の業種と機能について論究され、宋代には田・宅・家畜・人身などの主要動產はじめ、その他普通動產を含め、『賣買、賃貸借の取引には、牙と稱する仲買業が發達し、これに附隨して倉庫・旅館業を兼ねる仲買問屋、貢租や官物の納入を請負う租稅請負人が現わ

れた』ことを實證される。

第六章、商人資本の諸性質。第一節、商人資本の形成—宋代における福建商人の活動とその社會經濟的背景—」。本節では、閩商と呼ばれた福建出身の商人が、固い地緣的紐帶で社會的經濟的に相互に結合して活躍した樣子を描出される。福建は、人口過剩と經濟的發展に伴う營利機會の增加によって、北宋中期より商人層を輩出したこと、人口過剩のため、極度の耕地利用・細分化が行われたが、それも限界に達し、その結果として農產物の商品化や他產業の育成という方向がとられたこと、および社會的階層分化が進行して農民の多くが商業關係に轉換し、外地への發展に際しては、同鄕意識で相互に結合したこと、福建商人は海商として有名であり、その他沿海運輸業、內陸各地の商業、金融業など樣々な職業に活躍したのであるが、これは彼ら特有の意識上・身分上の社會的背景があったことなどを明らかにされる。

第二節、商業經營の性格—幹運・經紀を中心に—。本節では、商業經營の技術上の問題について考察され、この時代の商業發展の樣相をとらえられる。唐宋の頃に現われる幹運・經紀なる語が、商業經營を意味するようになったが、これは商業の發展と密接に關連していること。しかし、宋代の商品經濟の發達段階では、業務の專門化は成長過程にあって、後世ほど明瞭な分化が、呼稱および職能上に現われていないこと。主人と經營者との間には封建的な舊體制の隷屬關係が濃厚であり、宋代は商業經營の技術的發展の萠芽時代であると言えることなどを解明される。ただ、本節第二項で、富豪や地主・商人の家で、家族外の管理者に家計の運營を委託する慣行が、相當普及していたと說かれるが、官僚の家でも幹人など家計管理者がいたことは多くの例があるようであり、富豪・地主・商人と官僚との關係が、種々の形で關連していたとは見られないだろうか。

第三節、商業的富の性格。個別資本の經營では、發展に限度があり、種々の商業に資本集中の萠芽形態にあたる仲間組織が生まれたこと、そしてそれが連財合本などの個別資本の集中化に移行して行ったこと、しかし、獲得された利潤は、土地を主な投資對象としたことなどを說かれる。

第七章、社會と商業。第一節、消費の增大。都市生活者である貴人・士大夫・富民らの奢侈的消費が增大し、この風潮が庶民にも浸透したため、都市・農村を問わず消費が增大したこと、日常必需品に對する消費は著しく擴大・多樣化し、これが市場における購買力を高めたことなどを述べられる。

第二節、農村における非農業的職種の增大。宋代において非農業人口の比率が高まったこと、それは、當時の農村が激しい階層的分化を經、單純に農業を以て自立自給するよりも副業的および機會的に商業營利を營む者が、上下の階層に亘って存在したこと、これは、農村が自給自足的狀態から商業組織の發展によって都市と統合され、社會構造上に都市化現象 urbanization がおこり、社會分業が進展したことに起因することなどを論じられる。「第三節、營利の意識」は省略。

第八章、宋代の力勝稅—國家と商業との一關係—。本章では、宋代の商稅の中で一種の內地關稅にあたる力勝稅について考察され、力勝の名稱の由來や、力勝稅が官僚支配に利用されたこと、力勝稅の收入は地方財源となったこと、商稅濫徵の名目に力勝稅が使われ

たことなどを解明される。そして、南宋における力勝税免除の強行は、地方財政のある程度の犧牲のもとに流通を回復し、集權體制の安定化を計る必要が國家體制の中に存在したためであることなどを明らかにされる。ともすれば單なる制度史的問題の解明におわってしまう内容を廣く社會經濟的な背景と結合させられた論考である。

以上、大づかみな紹介をしてきた。宋代の經濟史研究にはずぶの素人の筆者にとって、斯波氏の大著を批評することは不可能なことで、專ら内容を紹介した。著者自身、本書のあちこちで述べておられるように、一見孤立的分散的になり易いテーマを、常に宋朝社會全體との深い關連性の上に立って考察され、しかも、膨大且つ未整理、雜多な資料を、可能な限り蒐集・整理して一つ一つ實證される研究方法には、全く敬服させられてしまうのである。著者がさらにいろいろな分野に研究を進められ、次々に問題を解明されることを切望し、期待してやまないのである。ただ、斯波氏が主として宋代の民間における商業を追求されているため、士大夫官僚と商業との關係の解明が若干少いのは、いささか殘念に思われる。ありきたりの見解ではあるけれども、最終的には官僚など支配階層との關係を無視することは不可能ではないだろうか。最後に、恐らく出版期日のせいであろうか、誤植がかなりみられるようである。例えば一九三頁『元の四明の載。〔戴〕表元の剡源載。〔戴〕先生文集』や二九八頁『明。〔宋〕の春明退朝錄』や、三二〇頁『清明集戸婚門庫本〔爭財〕』などである。

書評には程遠く、紹介に終始し、しかも論旨を誤解した所が多くあったと思う。著者の寛恕を乞うて責をふさぐ次第である。

（衣川　強）

東洋史研究叢刊

第二十　隋唐史研究
布目潮渢著
A5判　本文四九五頁　附索引
定價　二八〇〇圓

第十九　中國古代の家族と國家
守屋美都雄著
A5判　本文六五〇頁　附索引
定價　三二〇〇圓

第十八　中國政治制度の研究
山本隆義著
A5判　本文五三〇頁　附索引
定價　三〇〇〇圓

右書御希望の方は本會までお申込み下さい（國内送料本會負擔）

京都市左京區吉田本町　京大文學部内
東洋史研究會
振替　京都三七八二番